

男女共同参画シリーズ その2

主婦から技術士へ

ー土木と土木を担う技術者に魅せられてー

From a Housewife to the Engineer

ー Attracted to Heavy Construction and the Engaged Engineers ー

1 私のキャリアパス

私は元々リケジョではない。県立高等学校の普通科を卒業後、製袋業界の総務部に入社し一般的な事務に携わっていた。その後、結婚退職し、育児中に縁あって建設会社準社員として建設現場に配属されたのが土木との出会いである。

当時24歳、見るものすべてが新鮮で、優れた「技」と「思想」に感銘を受けた。それ以来、彼らに少しでも近づきたい一心で技術と思想を学ぶことに努力した。少し土木が分かってきた頃に現在の会社に採用され、現場担当技術者、施工支援室コンクリート主任技術員を経て現在、企画支援室室長である。しかし、ここまでの道のりは、決して平易ではなかった。

当時の経営層は「高校普通科卒」の私を持ち出しては技術職員にはっぱをかけた。当初、他の技術職員にとって私は「余計なことをしてくれるヤツ」でしかなかったようだ。私はこれまで、女性だから配慮をと自ら要求したことは一度もない。男性と平等に評価して欲しいのだから、男性と同じ待遇でいいと思ったからだ。

しかしながら、男性社会の建設会社において当時の風潮か、男性と同じ成果では同じ評価を貰えなかったのが現実である。女性を男性同様に評価する「前例がない」という壁を打ち砕くには、「前例のない成果」が必要だった。信頼を得るたびに増えていく大量の仕事は「能力を示すチャンス」と考え、進んで引き受けた。「できません」を口にするのは「私の能力はここまで」と自ら明言したようで嫌だったのである。そしてこれからも、できる限り口にしたくはない。

こうして土木の知識「ゼロ」から始めた私は、常に身の程知らずの目標を掲げてはひとつひとつクリアして今に至っている。目標は高い方がいい

い。とはいえ、「技術士」は称号が欲しくてチャレンジしたわけではなかった。「資格取得」は私にとって、土木技術者としての知識を増やすための「手段」であり、少しでも優れた「土木技術者」になりたかったに過ぎない。しかし「技術士」となった今、その意識は変わった。大きく変わったのは「責任」である。社会・国民への「責任」はすべての技術者にも課せられているが、プロフェッショナルエンジニアとしての「責任」はとても重く、技術者としてだけではなく、人間として大きく成長できた称号である。

2 組織での役割

土木業界は残念ながらまだ、女性にとって働きやすくはない。しかしながら、現在の会社は私にとって良い環境であった。女性に役職を与えると前例がない評価を下すことにずいぶん時間を要したが、個人的に私をサポートし、応援する上司・同僚がたくさんいたからこそ現在に至っている。中小企業であることも幸いし、現在は企画支援室室長として本社での業務に追われる毎日を過ごしているが、以前と少しも変わらず現場が一番好きである。



写真1 施工審査会の様子

また、経歴からか、私は土木について他の技術者と少し違った視点を持っているようだ。「そもそも、なぜ？」から始め、考え、議論するきっかけを与えることに少しは役に立っていると思っている。また、普段見かける現場職員の表情と姿勢が気にかかる。うなだれた職員、背中が丸まって生

気の落ちた職員は現場で苦労しているに違いない。受注活動もさることながら、彼らの成果で会社は存続できるのである。少しでも彼らがより良い成果を出せるようサポートしたいと考えており、今の私にはそれが一番嬉しい業務かもしれない。

3 ワーク・ライフ・バランス

担う責任が大きくなるほど、何かを犠牲にし、断念せざるを得ない時がある。何の犠牲もなしに管理職が務まると思っていないので、現在も家族には、どのような緊急事態があろうとも仕事優先であることを伝えている。自分自身の健康を後回しにしたこともあったが、自分で決めたのだから不服はいえない。それでも私は主婦であり母であり、そしてとうとう祖母にもなった。仕事、日本技術士会の活動、そして残りの時間を家事に充て、休日は家族と犬の散歩を楽しむ。全てを一生懸命やることで家族の多大なる理解を得ている次第である。私のワーク・ライフ・バランスは、家族の協力のもとに成り立っている。

しかし、これからの時代、女性が家族や自分を犠牲にしなくてよい社会でなければならない。それには企業や男性の意識変革が必要で、「女性が家事と育児をする」のが当たり前ではない、との認識が不可欠である。企業内の男女共同参画同様、家庭内においても家族の意識変革がなければ仕事を続けることは難しい。男女が助け合う社会へと変わるよう、女性活用の利点と女性が抱える問題点の克服について社会に発信していくことに私が一役買えれば幸いである。

4 技術士としての活動

「技術士取得に価値はあっても日本技術士会への入会には価値を見出せない」、「日本技術士会がどのような活動をしているのか知らない」、「入会しても業務に何の影響も与えない」、「現役が少ない」など未入会の企業内技術士からよく耳にする。同じ技術士としては非常に歯がゆい思いでいる。

日本技術士会に入会した翌年、建設部会幹事に、その翌年には委員会にお誘いいただいた。現役として、女性として部会・委員会の運営に携わ

ることとなり、企画の提案・運営に積極的に取り組んでいる。

2016年度より近畿本部建設部会では、現役技術者向けの取組として、マニュアルや前例にとられることなく自分で考えることのできる「技術者育成塾」を始めた。受講者は、あらかじめ配布された失敗事例の課題について意見を持って臨み、それぞれ受講者の考えを述べて講師と議論する。私たち企画者側は、温故知新と次世代を担う技術者に伝えるべきことを伝えていく技術伝承の場であると位置づけている。



写真2 技術者育成塾

私たちは、講演会を「開催したこと」だけで満足してはいけない。社会は「内容・成果」をしっかりとしているという思いで、この会を今後も継続していくつもりである。

5 おわりに

他の部会・研究会に参加するたび、技術士が持つ知識と経験に驚きを隠せない。これだけのプロフェッショナルエンジニアが揃っているのである。できないことの方が少ないに違いない。刻々と変化する社会に合わせ、さらなる技術士の可能性を今後も追求していきたいと思う。

男女共同参画推進委員会より

リケジョではなかった河野氏。技術士は強い意思があれば取得できる資格であることを体現され、技術士の発展に努められています。

河野 千代 (こうの ちよ)

技術士（建設部門）

近畿本部建設部会 幹事長、協賛団体強化委員会 委員、会員拡大委員会 委員、科学技術支援委員会 委員

(株)久本組 企画支援室室長

e-mail : kouno@hisamotogumi.co.jp

